

# 地中海

*MARE MEDITERRANEUM*

2020. 2



令和2年2月1日発行(毎月1回1日発行)第68巻第2号

No.741

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下してきた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

二〇二〇年 二月号 (通巻七四一号)

◇今月の二十首詠……首里城

仲西正子 2

■作品 [A]

三浦好博・宮本靖彦他 4

A

牧野君代他 20

B

茂木静子他 52

C

森本ちずる他 64

A

越地幸子他 78

■オリーブ集

金澤敦子・河上悦子他 42

◇今月の二人

熊谷とも子・松本久子 16

香川進の生きものの歌 16

田土成彦 14

香川進師つれづれ 6

佐久間 晟 15

■設案まゆみ歌集『明日葉』批評

38

照り輝く

木村文字

私と短歌との出会い (210)

中原 陽 19

■歌壇月旦

読みに触発されるとき

楢垣美保子

51

◇シルクロード・カフェ

【責任編集】 木村文字 48

■遊覧寄港 〈紅花の彩り〉

藤野喜美子 50

送風塔

桃原佳子・中村博子・さとうちえこ 40

第一歌集の頃

三田享子 94

■十二月号作品批評

70

A……………牧 雄彦・岩井久美子

近藤芳仙・千葉む津

B……………八田晓美・根岸 亮

C……………田口紀久子

オリーブ集……………関根和美

今月の二人・作品評

久我田鶴子 18

最近の歌誌より

〔編集部〕 69

第68回地中海全国大会 (浜松大会) ご案内

96

クリップ……………95 神田通信……………表3

(表紙デザイン) Tzanko Kyga

## 首里城

仲西 正子

棘のなき木香薔薇は八方にぐんぐん伸びる純真にして

フェンス越え表通りの花となる木香薔薇の陽に向きて咲く

三畝のジャガイモの生ゆ一斉に土押しあげて朝の日を浴ぶ

土を割り生まれるものたくましさ小粒の種の芥子菜を蒔く

ガリ刷りの「首里城跡の赤木」教材を声にして読む八十六歳

媼より貰う「首里城跡の赤木」終戦直後の教材重し

戦さ終え児らへと紡ぐものがたり仲宗根政善の「首里城跡の赤木」

戦禍にて焼かれし根元に育ち来し赤木も見たるか首里城の炎

昭和二十三年生まれ。  
沖縄の会所属。桃原邑子に師事。

漆黒の天上こがし首里城の巻き上ぐる炎に呆然とせり

漆絵の王座も薨の龍も燃え城の正殿くずれ落ちゆく

米国より帰省の友と三日まえ訪ねし首里城 幻影となる

琉球の文化の華の拠りどころ愛惜を知る城もえてのち

焼け残る首里城望む池の辺に人は寄り添い黙して見つむ

焼け残る首里城の辺に口ずさむ惣之助の詩「しずかさよ空しさよ」

焼け跡の城の空をゆく雲さびし月は哀しや秋風の吹く

首里城が燃え崩れしよ令和元年十月末日 五度目と聞く

正殿の大龍柱は降る火の粉はらい払いて耐え残り 在り

流れ落つる水におさるれど抗わず太く息づく水草の青

鎮火まつ赤木の杜の小鳥ら声ただならず城もえしとき

焼け跡の片辺の赤木は繁茂してまた再びの朱の城をまつ

# 作品 A

## 三浦好博

素通り

・銃

死顔はこんなものかな眼鏡とりのけぞつてうす目に鏡をみたり  
 なで肩の吾をすべりゆく北風が身に沁む齡生きねばならぬ  
 生きるとは歩くことなり坂のぼり公園に来て落葉を掃けり  
 闇をゆるめ時雨が通り過ぎゆけりさあやすまうか雨戸を閉めぬ  
 サイレンを鳴らす車に譲りたり瀕死の養母も乗せられたりき  
 湯の温度少しあげたり喜寿の身と秋惜しむなり立冬の夜  
 嫁の顔色付度すれば日曜にあれど孫住む街を素通り

## 宮本靖彦

祝御即位

・凌

即位典の万歳に和し吾も寿ぐ三代の帝テレビに親し  
 令和楽奏さるるなか新帝は笑顔にこやか御列のスタート  
 都内パレード皇居広場に祝賀の列重なる両側御車進む  
 両陛下手を振りたまふ皇居前広場両側人々あふる  
 押し並ぶ祝賀の人等スマホにて手を振り応ふる両陛下を撮る  
 にこやかに輝く笑顔両帝は祝賀の国民に手を振られ過ぐ  
 大嘗祭灯なき夜ふけ陛下には民の幸福と豊穡祈らるる

## 三好聖三

衣裳

・伊

のど飴をしゃぶりつつ見る半島の天城大室はやんと立てり  
 電車にてむすびを食べるならわしの時折り辛き歌を読みつつ  
 この年は秋を忘れてきたらしい紅葉黄葉の衣裳とともに  
 散水に虹はたちたり畑中の三筋四筋の小松菜の上  
 陽の方へそろって傾ぐ玉葱の苗の力を健気と思う  
 強面の松鳳山がゆるみたり勝ち越し得ての支度部屋にて  
 檜檜舎、古き茶房の隅に読む〈桜〉は外の虚偽の重ね着

## 御代田澄江

庭の秋

・茨

水雨つき亡夫の墓参をなすと言ひ出で来たる息子に天は晴れたり  
 御即位の高御座描かるる500円コイン子は置きゆけりわが机辺に  
 2020年オリンピックの六種競技夫々描かれし100円貨六枚も  
 前向きに生きよと吾に言ふことし吾も応へて希望持ち生きむ  
 河骨とふ花を幾人詠めるあり水草の種か興味惹かれぬ  
 心不全後要支援<sup>1</sup>に認定され清掃支援受く貰ひし時間大事に使ふ  
 我が庭に秋は来にけり葉生りコキア色づき食用菊咲く

茂木 斌

ホンダワントー

・埼

レッドブルホンダのワントー待つてみた20戦目になんか Power Of Dreams  
インテルラゴスに予選も完璧フェルスタッペン優勝の栄光見事その手に  
夢に見たホンダのワントーシーンなり宗一郎も破顔しをらん  
「この勝利宗一郎に捧げます」田辺TDのコメントまさに  
ハミルトンにやられつばなしのGPにフェルスタッペンこそぞの一撃  
直線に駆るスピードの超300キロ翼のあれば飛ぶ速さなり  
この秋のわが寿ぎの最にもホンダワントーフィニッシュのあり

もとむらしげと

秋

・そ

咲ききりし花を捨てれば土のみの鉢がならびぬ仲秋の庭  
夢一つ叶えば生きる意味ひとつ失いたりとおもう寂しさ  
サヨナラの声に続いて駆けてゆく靴音のする三叉路の秋  
しずけさに満ちいる朝を正座して挨拶かわす妻との日課  
弱さをばわが身にもあると思わぬか落語家今日も人を切り捨つ  
「論語」なる「徑（みち）に由らず」わが部屋（やま）の壁に掛け来しこの二十年  
いねむりを常とせし子がテスト前質問に来ぬ何やらうれし

牧 雄彦

この坂の果

・大

手押車押しつつあへぎのほりゆくおうなに遠しこの坂の果  
老健施設に友訪ぬれば人所者の多くの視線がわれを追ふなり  
見舞ひきて君がことばを拾はむと耳を寄するにただあまふのみ  
幸せなりしとほき日のこと夢見むか車椅子にて居眠る老いは  
訪ね来し西行の墓木洩れ日が石の面に差してゆらげり  
西行の墓のめぐりを漆黒の蝶ひとつ舞ひしばらく去らず  
悩みつつ一生を生きて西行はここに果てしか花の咲くころ

松浦 禎子

カプリウオッチ

・羊

世に高き風光の地ぞアマールファイ湾岸をゆく時のめぐみに  
ゆく夏の日射しを受けて湾内に漂う帆掛けドラマを秘むか  
二千年前の人々埋めしを知らぬ威容にヴェスビオの尾根  
撮影はお心付けでよしという槍持つポンペイの騎士と一枚  
炎天下のポンペイめぐりはあきらめてマリナー門を遠くみつめる  
カプリ島の奇岩、洞窟、青い海船底に背を付けて巡りぬ  
本当に病いは飛んでしまったか旅の証しのカプリウオッチ

松永 智子

衝

・嵐

呼びとむる術なきひとつ風のやみ音絶えしまま夕日が沈む  
わらはべのうしろまだ見ゆしやくりあげしやくりあげつつゆくらしき影  
ものいはぬひとひの終りああと云ひ空仰ぎたり雲のなき空  
なにもなくなにもなくしてただとほし暮れはやく空仰ぎみて立つ  
たれにいふことばにあらむ窓閉づる前にひとこと「おやすみなさい」  
声のなく行く人の影とほくなりあはくなくなりつつ間にまぎれず  
ビルの昼にんげんの声衝の音絶えしときま風のふきすぐ

八乙女 由朗

台風十九号

・柴

生を享けしは大河・支流の三角地住み処となしてああ九十年  
私家が家を見んとて吾娘は水張れる二軒の道を歩み行きたり  
町吏なる主は自が家捨てしまま徹夜なしつつ部署に計りぬ  
大川川に注ぐ支流は破れつつ溢れゆきけりゲリラとなりて  
水吐けの妨げとなりし線路土手床上浸水を招きておりぬ  
量水器の蓋の流失多くして出でしもありぬ畑の隅より  
福島の大合の帰途乗りきたる阿武急線は復旧遠し





大 浪 美 雪

涙のごえり

・森

嵐前の静かなるうちより市役所は繰り返し告ぐる「避難をせよ」を  
電気ガス水のある今と豚汁を里芋人參乱切のまま

雨音の弱まるせつな交じりくる緊急車両のサイレンの音  
ラジオのみの情報のかなか内房線走りゆく音 まだ大丈夫

暴風に土台より揺れし一夜明け開けたる視界に屋根のなき家  
テレビ見たが無事なるかやと子や妹弟、歌友のメールに涙のごえり  
ブルーシートかけらるる家の庭先に一本残りたる皇帝ダリア

奥 田 清 和

花より団子

・大

つたへ来し桂のもみちあかあかと色は呀えきぬ猪名の川面に  
手みやげの銘酒八兵衛初しほり酒釀み初めし曾祖父の味  
いつしかにピリケン像がすゑられて落語帰りの客にほほゑむ  
卒業の記念に遺す藤棚の行方は知らず旧き学園

高名の芸人となれる教へ子のテレビの像に声かけぬたる  
文科省英語英語とさげべどもやまと心のゆくすゑしらす  
愚公らはさくらさくらと日を重ね餅くらはんと往きし舟あり

奥 田 陽 子

川の音

・羊

傾きてうつろいゆる秋日射し庭なる池の面は映す

礼なせる女うつくしき身のこなし車止めまで送られてくれぬ

窓ひらき川の瀬音を聴きいたり闇に白波かくるるあたり

飽かずして駆ける少女部屋うちひゅうひゅう風の流るる音す

ほととぎすその名教えて指さすに川の流るる音入りきたり

上流の白波みゆる宿の庭に幼き者と写されてあり

時どきは想像の友とも遊ぶらし幼稚園の空き待ちている眞子

小 野 雅 子

三春駒

・羊

黒駒は子育て守り白駒は老後の守り三春の木馬うま

たてがみも尾も直ただと立ち空を睨む四肢ふとぶとと三春白駒

わが老いの守りのためと純白の木の駒ひとつ贈られきたる

みつむれば木の駒の四肢やはらぎて歩まむばかり紅葉する中

朝は冷ゆる秋の晴天 休憩の芝刈る人ら日陰に座る

もの音の一つもせぬ日 樹の影が長く伸びくる午後のペランダ

いつ見ても散つてる木の葉散りつづけ地をうづたかき黄に変へてゆく

菊 岡 栄 子

季節

・漣

真っ青な秋空のもと「漣」の歌会へ夫に誘われゆく

療養中は外気に触れることもなく空の青さに秋を気づけり

街路樹の枝先は早や紅葉す季すすみゆき霜月に入る

台風に襲われるとも施設にて何事も無く平穩に過ぐ

千曲川の洪水による被害を聞く水の力の恐ろしさ知り

食欲の秋とは言えと縁うすく流動食さえ吞み込みがたし

吞み込みの難しくなり食事さえ楽しみ薄くなりてゆきたり

菊 地 栄 子

電灯

・漣

「菊池」より「菊池」の格が上と言う続けて届く「菊池」の葉書

スムーズでなかった部屋割りを振り返る同じたぐいを次は束ねん

掃除機を掛けて炬燵をしつらえるしんどいけれどやれば出来たり

先ずテレビ番組見るに読み残す昨日の新聞一頁から

地響きを立つるはわれか道端のこおろぎの声不意に止みたり

車椅子に歩道を渡る青年は大方の望み叶えしごとし

施設より戻り居るらし隣家に今宵はまぶしく電灯が点く

## 木村文子

旧小学校

・羊

柔らかな芝の斜面のその先で安田佩<sup>やすだ</sup>の彫刻に会う  
小学校だった時代の優しさは小さな椅子と低い蛇口に

金風の玉子のような彫刻が口を開いて廊下に坐る

この扉だれかが開けたこの廊下だれかが走った百年前に  
踊り場に〈誰かの心〉の彫刻が佇んでおり影をもたずに  
丈ひくき下駄箱のうえにミツウマの長靴一足 草の葉をつけ  
夕なずむ野原のなかで君待てばとんぼに囲まれ歩み来たりぬ

## 草刈十郎

鬼の子

・世

雨風に晒され案山子役目終ふご苦労さまの言葉かけたき  
藤村の詩を思ふなり千曲川氾濫爪痕あまた残せり

台風のもたらす出水泥の海人知を越ゆる大出水なり

荒々しき台風泥や被災者の悲しみあまた置きて去りゆく

ローカルの一輛電車鬼の子の見送るだけの無人駅なり

新そばや悲しきことや苦しきことすべて一緒に啜り込むなり

朝霧に過疎の村々隠されて水音さやかに流れるるなり

## 國井節子

勝股の池

・春

薬師寺を背景として池のあり万葉集の勝股の池

十年の解体修理を成し終へて今し薬師寺の塔顔をのぞかず

勝股の池に浮きたる鴨の群れ人を恐れず近寄りてくる

本物の星には比べやうも無からむにふいに見たかりプラネタリウム

一鉢の赤きネリネの花咲きて寒きさ庭にわが目なごます

借り畑に友の作りし大根の柔き青葉の付きたるうれしさ

お茶の花秋から冬を愛らしく白くてポッチャリ匂ひ立つなり

## 小泉泰清

わが米寿

・う

父母疾く亡くし、ひ弱なわれなれと天運ならん米寿迎ふる  
緑濃き町に生まれて住み古りし米寿迎へむ四方に謝しつつ

われ米寿曾孫生まれて染しみの膨らむにつれ卒寿夢見る

われ米寿六十年共にせし妻に感謝は限りなく湧く

脳梗塞患ひたれど軽く済み短歌や詩吟のみちにあそばん

米寿なるお披露目をして染隠居欲をおさへて仏心目指す

曾孫なる男の赤児細腕にずっしり重くわが生のすゑ

## 河野繁子

秋

・雁

電線にのびして糞して羽づくろう鳥ながくいて秋の陽を浴む  
雨の日も風ふく日にも電線に休む鳥いて里山の秋

散歩道足をのぼせば山間のはるかに見ゆる十方の峰

嶺多き山と嫌いて登らねば踏まず懐かしなだらかな尾根

あおき空心の迷い雲に乗せゝえいと一つの決断をなす

ゆきつめば「なんとかなる」と別の声茶の花楚々と黄色の花芯

足悪く逃げるは成らずと笑みうかへ水漬く前なる男の人映す

## 小西美智子

山茶花

・大

教え子の少女のままの素直さに五十年を経しと思えず

ひとしれず散れるはなびらくれないにひとひらふたひら庭芝のうえ

天皇の遺稿に残れる「國」の文字孤高なる生の胸をつきくる

地震への備え聞きつつしのお枕もと防空頭巾を置きて寝し夜々

日本は武器を売る国になりにしかニュースを聞きし夜半の足冷ゆ

大雪の寒気にふれつつひらきたる山茶花けさは救いとなりぬ

日に向きてひらく山茶花ひかり浴びいのちのかきりがよいにおう

小林能子

菓の饗応

・羊

伝はず伝へ得ざりしことさへも見守りて来しわが眼はや  
 九種類の目薬を点す異常さを肯定せるも病める目のため  
 でこ屋敷より三春駒が来ぬ 鬨を撫でればいななき風を起こしぬ  
 「三春駒の白」の戀つかみしまま天空を飛ぶ夢めくるめく  
 枕辺に友の恵みの三春駒寒夜を花の夢路に誘ふ  
 遣はされし三春駒は老いの守り神 菓の饗応こ照覧あれ  
 懐かしき応援歌として母の歌ふ渡辺はま子の「愛国の花」

近藤 栄 昭

トリプルアクセル

・福

三巡目思い出の話続きいる施設の母に Rond 途切れず  
 百六歳大正生まれの施設の母血液検査はずべて正常  
 聞こえたる耳が聞こえず聞こえなき耳を頼りに時々笑まう  
 生という琴線切れしか百六歳母逝きたいと近頃言わず  
 メシ炊かにや寝言大きく施設の母生活ひそむ認知症の底  
 ゆび先は白蠟溶ける透明に手荒れ消えいる百六歳に  
 木の葉舞う母見舞いたる並木道トリプルアクセルふあっと降りる

近 藤 芳 仙

人工的に

・信

カラカラと点滴台の音させて廊にいつるは新たな一歩  
 埋められしペースメーカーわが心を人工的なる動きにさそふ  
 点滴の管はつされて自由の身洗面台に顔をたしかむ  
 ガラガラと音をたてつつ嗽する生きゐることに手触りのあり  
 いれかかると病室の人らをみるゆとり熱きお茶など汲みきてわたす  
 入院の日に目にしたる桜葉のはや散りそむる庭をあとにす  
 左胸の鎖骨の下にもりあがるペースメーカー 馴染みゆけかし

坂 上 直 美

秋 天

・天

鳥を放て汝が胸奥の籠を開けこの秋天の青の果てまで  
 逃げてったワライカワセミ捕まった 空が青くて飛んでみただけ  
 秋深くみそらのいろはみずあさき天使の群の渡りゆくらん  
 腕を振り野の道を行く幼あり秋天高く風やわらかし  
 紅葉の中に小さき家ありて妻を亡くせし老い独り棲む  
 新しき妻迎えませ我死なば秋は紅葉を共に愛でませ  
 稜々と冬近き街に風の吹く君の故郷に母老い給う

坂 出 裕 子

は こ

・洛

いつまでも続く夏かと思ひしが金木犀の香り立ちくる  
 紅葉もせず散りたる花水木 朝毎ひろふ枯れし落ち葉を  
 子が置きてくれたる美しき宮ひとつ机上にありて今日もたのしむ  
 死ぬるまで絵を描きたしと語るひと絵を描きながら死ねたらと笑む  
 晩年は安泰なりと占ひにかつてありたり今か晩年  
 ほんのりと淡くかすめばなつかしく心寄りゆくおほる夕月  
 同じことくり返しつつ過ぎてゆく日なり平穩無事といふべく

佐 久 間 晟

日 葉 (二九)

・湾

些細なる事にも声挙げ奇める妻を時には疎む日もあり  
 余所からの刺激は無用この先も心に沸きくる思いを歌に  
 何という静けさならん午前三時ひとり歌詠む思いのままに  
 沈みゆく思いの程は胸底に留まり続くわれを束ねて  
 誰か知る九十四歳の老いばれが人に見せんとて歌作りいる  
 この辺で口説きは止めようと思えどもただに独りを寂しむのみに  
 何かしら悟りの思いか暗れ晴れと世界は揺がる心のままに

## 佐久間すゑ子

風鈴

・ 湾

長い九十余年を生きて来た。爪を切りながらしみじみと見つめる指戸を開けて朝の空気を深く吸う。いとしさも共に吸い上げながら風鈴の音がさみしいと語った母。私は今その音を聞いている風鈴の音を鉦の音に似ていると語った母の生涯を思っている真っ赤な色素が私の体に移って来そう。紅葉の林の中を歩いて九十四歳の誕生日の花束をうけた夫。赤子を抱いたように暫く離さない季過ぎて仕舞い忘れた風鈴が軒端にさみしくぼちんと鳴った

## 佐藤道子

看護

・ 甲

在宅看護朝に夕べに看護師来ます夫の気疲れ病院よりも痰取りの管に苦しむ夫なれば程々にしてと看護師見つむ病室に孤り眠れる夫の頬想ひて長き夜更けとなりぬ管いくつ身にまきつけて身動きのならぬあなたの切なさ想ふ我が家では眩き一つにも夫に寄る病院の夜半いかに淋しみ明日会ひに行くまで夫の安らかに夜を過ごせるや眠れず想ふ天地にみなきる生命かき集め夫に送らむ祈りをこめて

## 椎名恒治

デイサービス

・ 橋

デイサービスに運ばれて令和となりぬ九十六歳大正に生れて令和なりもういくつ寝るとお正月を唄ふ新しきマンションに住みて六か月過ぎぬ令和となりぬかくも一夜の夢は過ぐるかたちまちに新しき日付となりぬくれなるの花ひらくシクラメンの小鉢を机上に置きぬ上下の義齒はめてああ腔中のこの異和感よ一月ほど経つても日も夜もまたさがし上下錯覚す

## 鈴木結志

即位礼

・ 福

両陛下白装束に「皇靈殿」「神殿」に即位礼を告げられたもう「黄檗染袍」の御姿天皇は「高御座」に凜凜しく立ちぬあでやかな十二単の皇后は「御帳台」にまばゆくおわす剣と璽は皇位のしるし御璽と国璽「高御座」に共におかれぬ天皇の即位祝賀の御列を万感胸にあつくむかうる灯籠の明かりの下に天皇が「神饌親供」夜通し重ね新穀を神に供えて天皇が国と国民の安寧いのる

## 関根榮子

衣被ぎ

・ 埼

野にはまだ餌多くありや霜月の庭のピラカンサにくる鳥のなしはや雪の積もりし札幌映りおりマラソンコースの想像難し二、三株の里芋掘りて熱々の衣被ぎ食ぶ初物はよし友の家のはやも更地になりいと歩み近くで引返しはらく畑すみの菊花手折りつつこの年に逝きたる人々を想うしはらくじんわりと汗も出でたり三十分夕焼道散歩の終るわれもまた儼しき言葉欲しおり「年齢だから」という医師敬遠す

## 関根和美

唱和

・ 埼

いかように読む一文字か昼間見し石碑の謎が眠り妨ぐ謎解けぬままにしばらくふたをせん今日には今日の為すべきがあり八ヶ国のひとと唱和のアベマリア重なるところははずれるところ新橋のパーより見おろすビル群のおうとつ激シタワーのめぐり歯ならびのよきごとビルの建ち並ぶ香港の夜景思い出するも香港の母死にてまた香港の町も死にゆくと思くよ君は新しきテラスにキャンドルともしつつ自撮りする子の誰に送るや

高尾 恭子

冬支度

・大

二時間を介護話にもりあがるランチブッフエの元とりながら  
着ぶくれたコートに挟まれ立ち飲み卓に昭和のほおづえをつく  
ジャンパーの襟たてで駅前にピラを撒く友のグレーヘアがうつくしすぎる  
寅さんが「やあ」と来そうな夕晴れやライオン橋の川風に立つ  
大阪のおばちゃんと括られ気がつけばヒョウ柄スカート三枚持てり  
木枯らしにのって絵手紙とどきたり夕べ白菜さくさくと切る  
柿ひとつ木末に赤し口先をすべる言葉は色うしないて

高津 砂千子

ながれ

・風

突然の空いた時間もみじ狩り くないいを分け黄金に染まり  
大小の岩をすべりてゆく水の音異なるを耳は聴き分く  
白糸の滝の水量来るたびにちがうもまこと生きている水  
繁りたる原生林を仰ぐ間も滝のながれの絶ゆることなし  
滝に沿うきざはしゆるりゆるりと登りゆくなり鯉躰思いつつ  
南天に並びて白き南天のたわわになるさまざましむ真昼  
未来図のたとえ変わるもしっかりと土を踏みしめ常のごとゆく

滝田 靖子

団栗

・新

街路樹に団栗たわわ過ぎて行く今年の秋の記憶のやうに  
街路樹に実る団栗還り行く大地のあらぬ無駄な豊穡  
定年の後の暮らしに待つてゐる珈琲の香の立つ昼下がり  
起き抜けの心に残る言の葉はまだ見ぬ朝の夢の断片  
取り敢へず今日は眠らう取り敢へずの今日を重ねて明日を待たむ  
神宮の森の冷気に包まれて波立つ心に静寂戻る  
神宮の杜に踏まれる団栗の碎けて静かに杜に還り行く

竹下 妙子

秋から冬へ

・霧

生垣の山茶花の紅みぎひだり花はしづくを落して遊ぶ  
今日会ひし山茶花幾本冬の陽に花の吐息のあたたかなりき  
わだかまり心にあれば書く文字の乱るならむ今日のこの文字  
気の強き女だなぞと人言へり散りゆくひと葉の孤独は深し  
ひそひそと秋あたらしき悲しみか例へば人の悲哀のごとく  
美しく漂ひ寄りし蝶ひとつわれの視野よりいつしか消ゆる  
夕まけて木枯し吹けり纏はりし白き夏蝶命をとぎす

田土 成彦

陸橋

・宙

遠い記憶か何かのやうに道ばたの雨に濡れてゐる子供自転車  
木枯らしに吹かれアンテナに引つかかる三日月が薄暮の色を濃くする  
いまはもう誰も使はぬ陸橋の手摺り錆びたり街も老いゆく  
朝あかね薨いらかを染めてゆくいたはるごとく慰めるごとく  
変はりゆく駅構内の商店に迷ひとまどひ出口を探す  
紅葉の落ち葉は掃かず敷きつめる常寂光寺初冬尽日  
七条はシチジョウなどは言ひません正しくヒチジョウと発音します

田土 才恵

林檎の丘

・宙

匂いたつ乙女のような熟れ実抱き迎えくれたり林檎の丘は  
恵那の山遠見ゆる丘に凜と立つ揺るがぬ勇姿の苗木城跡は  
城跡の櫓の柵をすいと飛び蜻蛉はわれと今を生きている  
登り坂はげますようにひとつ咲く釣り鐘にんじん秋草のなか  
沈みゆく夕日は山の端ゆくりなく川色黒く深むるしばし  
谷川の色暗むなかな山の端をにわか夕日消えてしまぬ  
星月夜この山峡に人も樹も眠らせていま天は巡れる

## 玉井綾子

まぢ

・羊

「天気の子」アニメに描かれし新宿とそっくりな街に今日も働く  
通勤時 新宿駅に背い目の少女手に持つウサギ紫

地上への階段一段上がること身体のネジが巻かれる月曜

ゼラチンをしかと溶くコツものにして現部署名も呼び慣れて秋

スマホでの乗り換え検索 0円の巡回バスも出る日本橋

夕焼けをバックに町のシルエット 母の横で見たプラネタリウム

店先でコーヒーあんパン食べて子の宿題作戦を立て帰宅する

## 虎谷信子

想ひ出

・伴

踊り子の白きうなじに 朱の袴。高き音色の 繰りかへさるる

半上りの琉歌 聞きあて、ほろほろと酔ふ たまゆらの旅の宵なり

尾類馬の踊りに興じ、友も師も、てんでんなれや 舞台狭しと

赤き月見上げつつ帰る 首里の町。旅の心に 愁ひしみゆく

和みゆく宵は 琥珀酒さはやかに 閑雅に乾さむ。おんざろつこも

吹き抜けのらうんち楽はそろとなり、さんたるちあの声おほどかに

和みけむ宵なり。汝の背の君は、眼鏡の光る ろまんすぐれい

## 中島央子

流れ

・森

溪谷につらなる巨岩を彩れる照葉の径を娘と歩む

叱られしことなき父の享年に近しと想ふ紅葉坂来て

九十九折る谷間の径を脚弱きわれと経回るトヨタの「ポルテ」

宿までに無くなりさうな山径に主のやうな猿に眠まる

アルプスの流れに育ちし姿良き岩魚を食みぬ骨も余さず

夜叉神の峠につづく溪谷の流れに目覚むる一夜の宿り

母恋の笛吹く男の名を込めて南を目指す流れの速し

## 中島義雄

除幕式

・岡

三十年の歌碑公園の仕上げとて十基の歌碑の除幕式今日  
広らなる公園を祝賀の人垣り知己の掛け合ふ声が弾みぬ  
百二十五基の碑面に穏やかな冬日はありて人を立たしむ

「花もてる夏樹」の歌碑を撫づる人わが師に縁ある人かと親し

楽の音のひびく公園に声あふれ佐太郎を言ふ人茂吉恋ふ人

中ぞらに冬の火花のとどろきて幕外されし碑面かがやく

幕外ししばしの興奮にひと佇てど碑面穏しく懐ひを伝ふ

## 永塚節子

終

・銀

ふりむけど花見当らずひいらぎの香のみ漂う夕べの路地に

枇杷の花ひいらぎの花冬桜くもり日のもとみなつつましき

追いかけてなお追いかけて三度目の展覧会場「ガンガー」に会う

ガンガー河渡る水牛水の上は黒き頭と黒き角のみ

列をなす水牛数頭ガンガーの流れに逆らうそは生きるため

ベトナムに見たる水牛好物のほていあおいをゆるり食みおり

ろうばいの荅ほつほつ見え初むる越えゆく季へ覚悟を見せて

## 白子れい

小鷺

・洛

招かれて北野天満宮の庭先に道真しのぶ秋の陽浴びつつ

ひと日ごと黄葉紅葉の色ますを見上げつつ歩むころはずませ

あさ朝の吾を待つかに驚一羽昨日も今日も きっと明日も

吾が帰り待ちくる夫・子のなくて小鷺一羽にこころ通わす

野おもてを覆いてなびく薄穂の白きうねりにこころもうねる

背丈こす花野にひと日遊びたし車窓にただ唯眺むるのみにて

老いひとり住みいて感謝の日々多しひとのこころの温とさに触れ

ばばりようこ

茶目っ気な魔女

・鹿

台風の最中りんこの赤き集団おくり込ませて激励叱咤  
 帯はずらずバス乗り継ぎてナイトキャップおつむにどうぞと茶目っ気な魔女  
 深みゆく秋につつまれ上弦の月半身なれども毅然と立ちぬ  
 柿の実の熟ししトロリを熱もてる喉に流す とろりと沁みぬ  
 あまりにも佳き夢より覚めればしほしと曳く胸のたかぶり  
 脈絡も無きものがたり睡眠の間かさめてただよ小舟のように  
 おもいがけぬ夢のなだりに酔い痴れて二日酔いせる甘き幻想

浜谷 久子

いちめん

・地

他愛なく抜けるコスモス種落とす為事の終わりと抗うことなく  
 背丈越す枯れコスモスの山ほどを抜いて小芋のねぐらに被せる  
 コスモスの黄の蕊に黒く実る種風に弾けて土に眠る日  
 彩りのコスモスどれも蕊は黄の種を集めて陽に干す晴れ間  
 来年の予定の空白コスモスの植え付け片付けそろそろ終わりに  
 いちめんのコスモスいつも白色が紅色ピンクを爽やかにして  
 どの色も揃ってあわあわ一面のコスモス畑の風景となる

浜本 芙美

祭り太鼓

・夢

日に一度必ず思う友のあり鏡の前にて眉整える時  
 言挙げを為す相棒のいることの幸せしみじみかみしめている  
 ここにきて貪欲な性の目覚めたり生きる縁をひとりにれがむ  
 空高く祭り太鼓の音冴えて現つわが身の芯に響きぬ  
 「男意気」「小生意気」など八幡宮の祭り太鼓のにぎにぎしきかな  
 渡り蟹赤くゆたがりしが恬として秋寂ぶ食卓の上を占めいる  
 動物の形をしたる夕雲のふたひらみひら静かにうごく

檜垣 美保子

落葉

・昴

月のなき夜の方丈の畳のうえななめによぎる蜘蛛のいっぴき  
 ほればれとながめておれば一陣の風さらいゆくいちようの落葉  
 黄金の落葉みたして大袋ふたつをかつき土手をゆくひと  
 地をおおういちよう落葉の豊饒にたちつくすなり踏み入りがたく  
 ゆうぐれのいちよう一樹を目印につどろがごとき秋のひかりよ  
 枯れ枝にじょうびたき一羽鳴かぬまま尾を三度ふり飛び去りにけり  
 のほり坂ひたすらゆけば神社あり竹林をすぎ空が近づく

福田 庸子

Iターンの島

・今

島前と島後とさるる島山はあふるる緑と海流の邦  
 島おほふ森に息づく椎の樹の炒り実をふふむ古の味  
 島ぐらし分けあふ知恵を笑み語り甘藷・椎の実をすすめくれたり  
 普段着の女あるじがふるまへる島の甘藷のほくほくの味  
 夜暗き島のぐらしが身に合ふとIターンの青年七とせを語る  
 人間のぐらしが隠岐の島にある東京井の青年言へり  
 にぎやかに遇ひし園児ら三割がIターンの父母中ノ島にて

藤田 美智子

〈醸し人九平次〉

・新

亡きひとつながりゆるる言葉あり〈紮ける〉と聞けば母の指ゆびを  
 霜枯れの野に幻の父が立つ上着も着ずに寒くはないか  
 思ひもかけぬうはさを笑ひ飛ばしきて白と黄色の錠剤を飲む  
 天井の高さに夜を救はれぬ吐息は小さく床にころがる  
 〈醸し人九平次〉の力を借りてみむ今宵自分を解き放つため  
 〈星の金貨〉といふ名の林檎賜はりぬよきことをせし覚えなければど  
 囲はれてフレコンバッグの積まれをり熊出没の看板の先

## 藤森 巳行 墓

・銀

死ぬ予定しはらく無いと電話切る墓地のセールス今日三件目  
墓買っていつ死んでもいいと友は言ふさういふ奴は長生きをする  
三百万掛けて新たに墓建てて初めに親父が入つてしまふ  
我が墓は伊香保の近くはるな墓園墓参り後はお湯で浄めよ  
墓参りしなくてよいと子らに言ふ俺の骨など拜む価値なし  
お墓には俺は居ないよ霊山でしばらく遊びたはぶれてゐる  
俺の葬儀歌会葬はどうだらう一首持ち寄り讃へて下さい

## 船田 清子

いのちかなしむ

・天

秋空の真中にふうはり抱かれなばあれこれ痛みも解かれゆくにや  
秋空に燃えたつもみちのはなやきにいのちかなしむ季は来たりぬ  
わが街の黄葉紅葉は日に映えて黒ずむ露をふりこぼすのみ  
赤黒きこのもみち葉を4Kのカメラはいかなる色に撮るにや  
柗の初冬の薫りただよはずわが家も白き花芽を立てず  
固まれる土に生ひたる柗の花咲く力はなくて生きつづく  
老いの身にかなはぬ植ゑ替へ子の手待つ 頼る子の手の空く時はなく

## 久我 田鶴子

ごしんせつ

・羊

ただ小豆煮てみただけのキッチンに見守りサービスの電話がかかる  
ポイントは何もままかと訊かれを徹々たるものをことさらに言ふ  
ポイントを貯めてゐる間に引き出され情報ゆきかふ 知らぬは仏か  
守られてゐるはずなるをポイントを引き換へにする個人情報  
還付金詐欺に注意の電話くるわが家の老いかた見守りくるる  
見守ると見張るの違ひ かざしたる揉紙の縁こそけだちをり  
ごしんせつを疑ふわれのへそまがりいやなばあさんになつてゆくのだ

## 香川進の生きものの歌 16 田土 成彦

・月に行き月より戻る世なりともおたまじゃくしは生まれざ  
らめやも 『山麓にて』

一九六一年ケネディがぶち上げたアポロ計画は一九六九年、  
六〇年代のきりぎりりにアポロ11号の月面着陸によって実現した。  
私が初めてコンピュータを買ったのは一九八〇年代の半ばでウ  
インドウズ三・一搭載のものだった。そのさらに十五年も前の  
当時のコンピュータはいくら軍用とはいえお粗末なものだっ  
たらうが、それを頼りに月まで行ったというのは驚くばかりの  
ことだ。しかし、そのニュースには世間も熱狂したし、私も熱  
狂した。香川先生にとっても関心を向けられた時事だったのだ  
らう。一九六九年は香川進六十歳、田上里村での独居生活の時  
代であった。

歌は「おたまじゃくし」一連のなかのもので、この小動物に  
注がれている視線は温かくその生を肯定的に捉えられている。  
世情としての科学技術の発展による激変の時代に、水田という  
半ば人工的な環境とはいえ、その対極にある野生の命の営みを  
継続的に慈しみを持って観察されている。蛙はきわめて私たち  
に近い存在ではあるが、生物学的には両生類として特異な進  
化を遂げた動物と言われている。その皮膚構造などから農業類  
には鋭敏で、常に絶滅の危機にある生きものでもある。



## 封書の宛名とへそくり

佐久間 晟

### ◎封書の宛名

五十年を超える師からの膨大な手紙はすべて保管してあります。殆どが封書で、ハガキということは先ず無い。そして、これら封書の宛名の敬称を見れば、ほぼ内容の見当が付くというもの。即ち「様」の時は、普通の連絡か何かで気楽に読める内容。「殿」は推薦の依頼などやや改まった内容の時、「兄」はお褒めの時など、師が気分を良くした時。「詞兄」は原稿の浄書や資料の収集など、可成の労力を必要とする依頼など。逆に敬称の無い「佐久間晟」だけのことがあるが、これは作品のミスか言動のミスなどなど、兎に角お叱りを頂く時で、開封の手が震える書状。内容も凄いものであった。今になれば皆有り難い、懐かしい思い出だけである。

### ◎へそくり

平成六年十二月、師宅の火災。早朝の電話により駆け付けた時は、すでに現場検証も終わり、残骸の後始末を始めるところ

であった。指揮に当たっていた北沢署の刑事課長に、私の身分（師の弟子で、警察庁情報通信局所属の技官）を明かし、詳細を伺った。原因は床暖房からの失火ということ。しかし待って下され、床暖房は余り効果が無いということで、配線を私が外したことを告げ、事実、焼け残った階段裏の配線を確認したところ確かに外れている。しかし確かに床だ。それはもしや床に敷いた猫のカーペットに猫が爪でも立てて、ショートさせたのではということになり、犯人は猫ということで落着した。片付けを始めた本棚の上部、分厚い辞書のあたりが無傷なのである。作業中の警察官に辞書類を取り除いてもらったら、辞書の裏手は無傷。そして百万円入りの封筒四袋も無事。早速これを持って師ご夫妻の入院先へ。これは、師のへそくりゆえ、奥様は知らないことゆえ、師の耳元でこれの処置をお伺いしたところ「美智子へ」ということで奥様にお渡しした。奥様の驚きは大変なもの。「私が知らないことをなぜ佐久間さんが知っているのか」。それと、体一つでお逃げになって、無一文のお二人にとっては感謝一入。お見舞い金を開封して、上履きなどをお求めになっておられた。

このへそくりの仕舞い場所は早い頃師から伺っていた。「佐久間、壱万円札を宮中の一万円札と交換してやるか」と言われたが、私の壱万円札は、東京駅で切符の代金として駅に渡ってしまうので結構ですとお断わりした次第。その時、ここにへそくりがあるから覚えておけ、と言われた経験があること。不思議な因縁でもあった。もし、これを知らなかったら、焼け跡の残骸として焼却されていたもの。まさに強運というべきか。

## 今月の二人

### 四季

熊谷とも子

千年の都の春は色めきて枝垂桜はあでやかに咲く

春は桜、秋はもみじの便り待つ時の移ろい早まる思いに

あざやかに色とりどりの傘の波五月の雨に街は華やく

六月の空にかりそめの雨降らし雲黒々と垂れ込めるが見ゆ

梅雨空に調べのごとく咲き揃う赤きうつぎの花はしとやか

足元の白きコスモス風にゆれ秋の気配をふとも気づく午後

人の世には小説を越えし事実こともありてまさかの道を歩むことさえ

悲しみの日々をいく度ふり返り新しき心に別れ道ゆく

あざなえる縄のごとしも苦と楽のはざまにて待つ月の出ずるを

みちのくの都に生まれ幾年か縄文の悠久をいまこの身に負いて

うたづくり日々の暮らしの折りにふれ大和ことばは一葉のごとく

### 歌ころ

私は幼い頃から童謡を歌うのが大好きで近所の方々から「大人になったら歌手になるといいね」と言われておりました。

朝、目が覚めると布団にもぐったまま歌を歌い始め、玩具のピアノで思いのままに伴奏したり。中学生、高校生の頃はコーラスでコンクール。全国大会も経験しました。あれから七十年、今も音楽に親しむ日々ですが、四年前のある日「短歌をやってみない？」と知人に声かけされました。以前から与謝野晶子や原阿佐緒に憧れを抱いていたので、すんなりと「ぶな短歌会」に入会致しました。

講師の佐久間晟先生はやさしく、ユーモアあふれる方でしたので楽しい楽しいでここまで参りました。初めて例会に参加した時、先輩の方々の素晴らしい短歌に感心でしまいそうでしたが、今まで心の中に温めていた音楽にまつわる短歌を披露し、先生に褒めていただいた事は大切な思い出です。歌を歌うように、ことばを大切に、思いを伝えてゆく。短歌の世界も、音楽の世界と共通するところが多分にあります。今はこの道を歩み続けていきたいと思えます。

## 二人の今月

### 思ひ出曆

松本 久子

幾年か袖を通さぬ夏ごろも鏡に問うもまた置紙たとうがみ

土用干し遠き昔の夏ごろも祖母の賜物波と雁がね

桜散り窓開け放ち衣替え畳の上の絹の抜け殻

雨に濡れ紅牙える山茶花も散る訳のある春のゆうぐれ

八月の古都の御寺は森閑と深き緑と冷気の伽藍

酷熱の都会を逃げて山の宿森林浴といで湯の至福

電波塔てっぺん守る鷹一羽静寂の空積乱雲立つ

何ゆえに父祖の地ばかり思い出すおりふしには訪れしものを

源平の屋島かすみで船遠く先祖の魂たまのねむる磯浜

ふるさとの海はなつかし夕風ゆづりかぜの屋島遙かにフェリー霞みて

樹に登り涼とる猫に遠慮して回り道する夏の昼下がりに

満開のはなびらゆれて頬撫でるかそけき鼓動はピアニッシモ

北からの災厄情報飛び交いて達磨となりし秋冷の日々

### 夢は創作

長年、趣味の手芸教室と仕事を両立させてきました。その代わり自己責任が生じて気を抜いては大変なことになる、私なりに歩んできました。そのような折に短歌にめぐりあい、その奥深い文芸に興味をもち、ネット歌会に参加するようになりました。インターネットには温もりがありません。顔が見えないので誹謗、中傷がひどくしばらくして退会しました。もう、ふた昔も前のことです。

次に前登志夫先生の短歌教室に参加し、先生の豊かな短歌のお話や意味深い蘊蓄を伺い有意義な時間を過ごしました。数年して先生がお亡くなりになり、また、独学に戻りました。そんな折にご近所の方の紹介を得て地中海大阪支社に参加させて頂きました。大阪支社の皆様との歌会はとても勉強になります。日常生活の小さな事や庭先の植物にも優しい視点のお歌を詠まれ、皆様の歌に熟練の技を感じました。私の夢は短歌にも創作があってもいいと思ひ、いつか美しくも妖しい短歌を詠んでみたいものです。

## ◆今月の二人・熊谷とも子作品評◆

## 調べのごとく咲き揃う

幼い頃から歌をうたうのが大好きだったという熊谷さんは、短歌でも歌をうたうように言葉を大切に伝えたいという。

・春は桜、秋はもみじの便り待つ時の移ろい早まる思いに

「春は桜、秋はもみじの」と始まる調べの美しきは、まさに歌をうたうようだ。季節の便りを待ちながら、時の移ろいが早まる思いでいるのは、重ねた齢から来る感慨なのか。

・あざやかに色とりどりの傘の波五月の雨に街は華やぐ

彩りの少ない街も、雨が降れば色とりどりの傘によって華やぐ。五月の雨であれば、初夏の明るさもそこに加わり、爽やかな一首になっている。

・梅雨空に調べのごとく咲き揃う赤きつつぎの花はしとやか

この「赤きつつぎ」は、タニウツギか、ハコネウツギか。種類によって赤の色合いは少し異なる。「調べのごとく咲き揃う」という比喩から、白く咲き始め、やがて赤く花の色を変え、ハコネウツギであるように私には思われたが、どうだろう。

・あざなえる縄のごとしも苦と楽のはざまにて待つ月の出ずるを

〈禍福はあざなえる縄のごとし〉というように、自らにも苦と楽は次々と巡ってくる。その狭間の、凧のようなひととき、月の出を待っている。ゆったりとした時の流れの中に身を委ねている作者である。二句で切れ、四句でまた切れ、結句の倒置法を引き出す巧みさ。このリズムのよろしさに酔わされるようでもある。だが、「苦と楽のはざま」とある、その「苦」や「楽」の具体は何であったのだろうか。そこが知りたいと思った。

## ◆今月の二人・松本久子作品評◆

## 山茶花も散る訳のある

評者・久我田鶴子

短歌にも創作があっというと言ふ松本さんは、事実そのまをうたうばかりでなくて、短歌にロマン性を盛り込みたいと思われているのかもしれない。

・幾年か袖を通さぬ夏ごろも鏡に問うもまた曇紙はらふみ

「夏ごろも」「曇紙」、これらの言葉が既に持っている、或る雰囲気。加えて「鏡」に問いかけるといふポーズ。女性ならではの仕草が見えるようだ。結句「また曇紙」は、なんとなく落ち着かない感じがする。受ける言葉を欠いているような。

・雨に濡れ紅牙える山茶花も散る訳のある春のゆうぐれ

「山茶花も散る訳のある」とは、なんとも思わせぶりな。

「も」の働きが妙に気になる一首だ。雨に濡れたせいで色鮮やかに見える山茶花だが、季節は春。山茶花の季節はすでに過ぎ去っている。春の夕暮れに遅咲きの山茶花が、はらはらと紅い花びらを散らす、その先の物語を想像したくなった。

・電波塔てっぺん守る鷹一羽静寂の空積乱雲立つ

漢字、名詞の多い歌だ。ここは、「電波塔の」「静寂の空に」と、字余りになっても助詞を補いたい。電波塔の上の一羽の鷹、背景には積乱雲の立つ空の静寂。スケールの大きな景だ。一羽の鷹が波乱に満ちた世界を統べているようでもある。

・ふるさとの海はなつかし夕凧の屋島はるかにフェリー霞みて作者はどこに在るのだろう。フェリーに乗って故郷に向かっているのかと思ったら、「フェリー霞みて」とあるので、フェリーを眺める位置に在るらしい。下の句、「屋島かすみてフェリーはるかに」ならば分かるような気がするが……。

私と短歌との出会いは友達のように置いていった婦人雑誌の通信教育の広告だった。

四十代半ばまで百人一首のカルタ取り以外短歌にはまったく縁がなかった。学生時代は「社会福祉」を学び、保育園、養護施設への勤務後、専業主婦の生活をしてきた。近隣に住む老いはじめた父母、姑、主人と二人の子供の生活を支えることで毎日が過ぎていた。心の中に漠然とした焦りが生まれて来ていた。これでよいのか、何かで充実したいと思っていた。家を離れることなく、毎日の生活に支障なく、経済的に負担のない、いつからでも始められる通信教育は私の望みにぴったりであった。早速申し込み、一ヶ月に二首ずつ提出して添削を受ける受講生活が始まった。三年ほどの間にグループの合同歌集への誘いがあり、三冊の歌集に掲載された。

一方、関節の病気がわかり、方々の病院への通院を余儀なくされた。

ある日、日曜日の午後突然に「地中海」海炎グループの久方寿満子先生から電話を頂戴した。「婦人雑誌の合同歌集のあなたを歌を読みました。短歌の勉強をするなら私のグループで学びませんか」とのお誘いだった。私の短歌を読んで下さった事の驚きと喜びは大きかった。短歌の結社の事もまったく分からぬままに、指導をお願いします

る事になった。その時の先生の言葉は印象深く憶えている。「裏白（新聞の折り込み広告の裏の白い物）と鉛筆、歌を作りたい意志、この三つがあれば一生続けられます。」とのこと。短歌の世界へとさらなる前進であった。足の病を抱えていて外出が自由にならなかつたので、まったく地中海の大会には参加出来なかつたが、月一度の添削指



法度だった。

先生は叙景歌の素晴らしさを教えて下さった。心がける事は(一)対象をよく見ることに(二)言葉は選ぶが、誰にもわかるように(三)主観を言わない(四)声調を整える(五)散文にならないように(六)詩情が感じられるように等々である。私の歌は出来事を述べているだけで散文との指摘が多かった。理解不足で自分の歌に反映出来なかつた。添削された原稿用紙にかかれた先生の赤字がとてども大切な思い出となった。

月一度の登戸歌会には片道二時間半かかり欠席しがちだったが、緊張した二時間の、先生を中心にした短歌の勉強は格別だった。先生のぴんと張った声、先輩方の批評の仕方、日々の生活と違った世界であった。婦路の先輩の励ましと慰めは温かく短歌を続ける勇気を与えてくれた。

股関節症の痛みに負け短歌が出来なくなつた時、先生の「歌に深さが出て来た」の言葉に踏みとどまった。その後も弱気になること必ず声をかけて下さった。久方先生が私の短歌との縁を導いて下さった事に深く感謝を申し上げたい。

現在の森の会の先輩方の励ましにも応えられず心苦しいが、この先も歌を作り続けていく事でお礼を申し上げたいと思う。

導と並行して海炎グループの登戸の歌会に参加して会誌のC欄に加入した。  
先生の指導は何年も学ぶことを離れて私に厳しく徹底していた。(一)広辞苑を買った(二)辞書で言葉を調べる(三)旧仮名、新仮名のどちらかを選ぶ。(四)混ぜない事(五)原稿用紙の使い方(六)提出の仕方(七)期日の厳守。遅くなって速達郵便を使うのは御